

戦前期日本農村における映画製作

—— 奈良県吉野郡上北山村を事例として ——

島 岡 哉

はじめに

昭和54年、奈良県吉野郡上北山村の教育委員会は、『昭和3年の記録』というタイトルを持った映画を編集した。「映画を編集した」というのは、このフィルムは、もともとは上北山村が昭和3年に製作した記録映画の残存している映像をつないで一本のフィルムに作り直したものであったからだ。同村教育委員会は、昭和54年に村役場の倉庫の中にこの記録映画のフィルムを発見すると、ただちに「ふるさと運動映画委員会」を組織して、修復保存に乗り出した。老朽化したフィルムは、フジ・フィルムの現像所で新しく16ミリと35ミリのフィルムに焼き直された。その際、新しく『昭和3年の記録』というタイトルが付され、また昭和3年に撮影されたこの記録映画を上北山村は「文化遺産」として保存することを決めた旨を記す字幕が挿入された。この映画は後に、ビデオにダビングされ、村内の各家庭に配布された。

『昭和3年の記録』は全部で21分の長さである。冒頭に、「この映画は昭和3年に撮影されたもので、どのような機会にどんな意図で製作されたかは定かではありません。しかし、この映画は村の文化遺産と考え、当時撮影されたままのもので何等手を加えていません」という字幕が挿入されている。この映画の製作者が上北山村であることははっきりしているが、映画の製作意図については今日では確認するてだては失われている。フィルム・テキストからこの映画の撮影者が誰であったかを特定することも不可能である。構成は、「第二巻」という字幕によって始まる部分と「奈良県吉野郡大台ヶ原山 神武大帝御銅像 及 上北山全景 八月廿日撮影」という字幕によって始まる部分との二部構成になっている。各パーツの画質とフィルムの回転数が異なっていることから、まったく異なるふたつのフィルムを一本にまとめたものであると判断される。本稿では仮に、それぞれを「前編」、「後編」と呼び、以下そのように表記する。

前編は、今述べたように「第二巻」という字幕から始まっていることから、「巻もの」

の体裁で作られたことがわかる。「第二巻」には、河合と小椋の二つの集落（区）が撮影されている。昭和54年に村役場の倉庫でこの映画のフィルムが発見された当時のことを知る富山尚一氏は、「西原とか東の川、ほかのどこ（区）のもあるはずやとおもてだいぶ探したけど、なかったんでな」と語っているが⁽¹⁾、失われて存在しない「第一巻」もしくは「第三巻」には、上北山村内の他の集落の光景が撮されていたと考えられる。

後編には、昭和3年、上北山村内の大台ヶ原山中に神武天皇像を建立した時の完成記念式典の様子が記録されている。映画製作の「協力者」として、第6代上北山村長や村内各区の区長・名士などの地域名望家の名前もクレジットされている。この字幕は、こうした地域名望家の人々が、自分たちの営みを映画製作によって記録しようとしたことを教えてくれる。

本稿は、上北山村という山深い山村が残した映像記録を通して、これまで農村社会研究が考察の対象にしてこなかった山村の人々の映像体験を記述の平面に浮かび上がらせることを目的とする。歴史資料の分析と聞き取り調査を手法とするが、この手法によって、修復された新しいフィルムの字幕に「どのような機会にどんな意図で製作されたかは定かではありません」と書かれているこの記録映画の製作の目的を明らかにすることができればと考える。

本稿の論述は次のように展開される。1章では、大正12年から昭和初期にかけて奈良県の吉野郡内で行われた映画製作の事例を紹介する。その中で、映画という近代的な映像メディアの一方的な受け手としてではなく、映画製作の実践的主体としての山村の人々の姿が描き出される。2章では、『昭和3年の記録』という記録映画を生み出した上北山村という山村のメディア環境が記述される。3章では、「前編」に撮された河合と小椋の二つの集落の映像がもつ意味を、各区の人々による文化的自意識の醸成という観点から考察する。続く4章では、「後編」に撮されている神武天皇像建立の映像の背後にある社会的文脈を読み解く。昭和3年当時、上北山村の人々が、どのような経済的環境下において、どのように自らの村を捉え、どのようにそのイメージを他町村や県、国家との関係性の中で作り上げていったのが考察される。

本稿は、昭和戦前期の山村で行われた映画製作に関する事例研究を通して、山村の住民が自らの文化的アイデンティティを模索し確立してゆくプロセスを考察するものである。映画という近代メディアによって自らの「文化的自画像」を描く実践的主体としての山村の人々の姿を描き出す試みと言い換えてもよい⁽²⁾。

⁽¹⁾ 2002年9月17日、富山尚一氏（河合在住、80歳）。上北山村役場森本晴美氏より伝言。

1 映画製作者としての山村住民

1-1 村役場による「名勝」映画の製作

農村の住民は、かならずしも一方的に映画を「受容」する存在ではなかった。大正後期にはすでに映画を発注・製作する村役場があった。こうした農村自治体による映画製作の企ては、県庁など地方官庁が発行した調査報告書や地方新聞の紙面にも記録されている。

奈良県庁が1923（大正13）年12月に刊行した『奈良県社会教育概況』の「一七、娯楽の部」に、「県下活動写真フィルム一覧表」が掲載されている。「官衛の部」、「学校の部」、「公共団体公益団体の部」に分けて分類されているが、「公共団体公益団体の部」に記載されたフィルム・リストの中に、奈良県吉野郡の十津川村役場と大塔村役場村が所蔵する映画作品の名前を見出すことができる（奈良県1923：233-235）。

この調査報告書によれば、十津川村役場は、大正12年12月5日、『十津川村の探勝』（4巻、4500尺、尺単価30銭）を1500円で購入している。十津川村に隣接する大塔村の役場は、大正12年12月5日に『大塔村の風景』（1巻、300尺、尺単価30銭）を90円で購入している。映画の「製造者」はともに、「東京市芝区桜田町粕谷助次郎」となっている。製作された年も同じであった。フィルムリストの中の「内容の梗概」欄にある「名勝の照会」ということばを用いて言えば、十津川村役場と大塔村役場村の両村はともに、自分の村の「名勝」の照会のために、その撮影を東京の映画製作者に依頼し、完成したフィルムを購入していたのである。

この2本のフィルムはいずれも失われて村役場にも現存しない。そのためこのフィルムの映像がどのようなものであったのかを確かめることはできない。しかし、奈良県庁が出した1冊の調査報告書は、大正12年にはすでに、吉野の山間の村役場に都市の映画製作者に依頼して村の風景を撮影させるという発想がうまれていた事実を明らかにしている。

しかし、ではなぜこの二つの村役場は、村の「名勝」を映画に納めることを考えたのであろうか。次節で内務省が主体となってこの時期に奈良県の吉野郡において行った名勝映画の製作について考察することで、この間に答える手がかりを見出したい。

¹²⁾ 「文化的自画像」は、文化人類学の領域で用いられる概念である。落合一泰によれば、「文化的自画像」とは、個人・集団が他者との関係の中で「自意識」を模索する過程において生み出されるものである。その過程では、政治的言説や歴史的神話などのほかに、時には偏見や誤解までもが動員されるため、「文化的自画像」は重層的に構築されていく（落合1996、落合1998）。本稿では、山村の人々が自画像を描くに当たって何を参照枠組みとしたのか、何を動員していったのかを考察するために、「文化的自画像」の概念を適用した。

1-2 山村へのまなざし／山村からのまなざし —— 内務省による「名勝」映画の製作と撮影隊の受け入れ体制

内務省は、1920（大正10）年頃から、国民に登山やハイキングを奨励するため、各地の名峰連山へ映写技師を派遣しフィルムに収める運動を展開していた。1922（大正11）年には、大台ヶ原と大峰山系の「秘境」を有する吉野郡にも、内務省から派遣された活動写真撮影隊がやってきた。奈良県公園課と吉野郡役所は、内務省から派遣された一行を案内する役割を各村役場に委託した。その任に当たったのは、主に各村の小学校教師や役場職員、寺の住職などであった。

奈良県公園課は、1924（大正13）年、この時の「大和アルプス」映写隊一行の活動記録を『大和山岳踏破記』にまとめた。第1章および第2章は「フィルム旅行」と題され、内務省から派遣された撮影隊の一行と各村から参加した人たちとの交流が随想的に記されている。第1章の執筆者杉田定一は、当時吉野郡吉野町の吉野山小学校の訓導の職にあり、内務省から派遣された映写隊一行に現地から参加した者の一人であった。彼は、「フィルム旅行」の冒頭で、撮影隊の目的を次のように端的に記している。

「田村林学博士を首脳とし、写真技師の粕谷氏兄弟を副とし、吉野郡役所の岸田郡技師嚮導とする活動写真撮影隊が吉野山芳雲館に來泊したのは本年（引用者注：大正11年）八月十六日のことであった。内務省の命を受け国民に山岳趣味を鼓吹すべく、我が吉野群山を活動写真に撮影せんとして來られたのである。田村博士は別に国立公園候補地として吉野群山を調査研究すべき使命をも帯びているのであった。」（奈良県公園課1924：1）

「フィルム旅行」には、「関係各町村よりこの旅行に参加したもの」として、吉野村や上北山村などの吉野郡内の各村役場の職員、奈良師範学校の教授、奈良県庁から齋藤内務部長、内藤県属、吉野郡役所から和田部長、上北山村の青年団、各地で雇い入れた人夫らの氏名が列挙されていた（奈良県公園課1924：1-2）。杉田の記述によれば、「上北山の青年団は大台登山をともにした」という。2章を執筆した堀内竹蔵も、「上北山村よりは心を單めたる歓迎の宴に招かれ」、「上北山村民の好意によりて此の深山に思い設けぬ贅沢極まる宿り」をしたと書いている。こうした上北山村の歓迎に報いるためか、活動写真撮影隊一行は、「夜七時より上北山村青年大会開催せられやがて講話がはじまる」と、そこで「弁士」を買って出て、講演を行っている。撮影旅行の最終日には、上北山村の龍川寺での中食の席上、住職が「国立公園と吉野について所感を述ぶ」という一幕もあったこ

とが記されている。こうして、内務省の活動写真撮影隊は、吉野郡の各村で「山岳趣味」や「国立公園」などの構想を広めるとともに、山村の支配者層や教員たちとの交流を深めて行った。

吉野群山および大台ヶ原一帯は、1936（昭和11）年、「吉野熊野国立公園」として国立公園に指定される。撮影隊が吉野各村を訪れてから12年後のことである。国立公園指定の決定にいたる間にこの撮影隊が撮ったフィルムが何らかの影響をもったかどうか、そのことには本稿の関心はない。本稿が目向けるのは、吉野郡各村の人々が自分たちの生活空間の映像を活動写真（フィルム）を通して体験したという事実である。完成した「大和アルプス」は、通俗教育の一環として吉野郡各村の小学校で上映された⁽³⁾。大人も子供もカメラの目を通して映し出された自分たちの風景の美しさを改めて感じ取ったはずである。県の教育会から送り込まれてくる教育映画や巡業の映画業者が持ち込む映画に映し出される映像には見られない身近さと思いがけない新鮮さを見出して驚き心奪われたことと思われる。そして村人たちはまた同時に、活動写真（映画）という近代的な映像装置によって自分たちの生活空間を自らの手で捉え直すことが決して非現実的な企てではないことを知ったはずである。

事実、十津川・大塔両村は、「大和アルプス」の撮影・製作が行われた翌年に、『十津川村の探勝』と『大塔村の風景』を自主製作している。「大和アルプス」は内務省から派遣された活動写真撮影隊による製作であったが、この3つの映画を撮影した映写技師はともに粕谷助次郎であった。このことは、大正11年から13年頃には、都市在住の映画製作者に依頼して村の名勝を活動写真に撮影させ映画にすることが、内務省、県庁、村役場すべてに共有された実践知であったことを示す。ことばを換えて言えば、吉野郡の各村は、「名勝」という枠組みによってではあるが、自らの生活空間を映像によって表象化する方法を会得していたのだと言える。

以後、吉野郡においてこの実践知はさらに蓄積され、映画製作の営みは自治体以外の団体にまで広がって行く。次節では、昭和5年に森林組合が取り組んだ映画製作について考察する。

⁽³⁾ この撮影旅行に参加した杉田定一氏は、翌年の大正12年に奈良県吉野郡野迫川村の北股小学校に転属する。野迫川村役場教育委員会には、大正14年9月吉日の日付をもち「遺稿抄録」と記された資料が残されている。その中に、杉田氏が関わった「大和アルプス」映画についての記述が見出される。

十一月の中旬に奈良県庁から活動写真隊が来た。その中に私が撮影されてある大和アルプスの映画が一巻あったので 私はこれは意外な奇遇と その巻だけ弁士をつとめた。

思ひきや かかる奥山の奥にして 我れ 活弁の 初舞台とは
このとき来校下されしは 太田大佐 今西理事 中村郡視学の各位
かうしてこの年即ち大正十二年は暮れた。

1-3 木材組合連合による「熊野材宣伝映画」の製作

昭和5年、吉野郡の十津川村と北山村の木材組合は、和歌山県の新宮町の木材組合と連合して、熊野材の宣伝のための映画を製作することになった。昭和5年6月1日付『十津川大塔時報』は、「熊野材の映画宣伝 撮影隊の北山入り」という見出しのもとに、森林組合による映画製作の計画を次のように報じた。

「新宮、十津川、北山各木材組合主催となり熊野材宣伝のため殖林^(ママ)から伐採、筏流し等の実況を映画として京、阪、神等の各都市へ送り出すこととなり去る二十五日、新宮木材同業組合長理事評議員並びに撮映隊技師の一行は北山方面へ出張撮影を開始した。」⁽⁴⁾

十津川と上・下両北山と新宮の4つの町村は、昔から交易圏を形成していた。この4町村の木材組合が連合して地元産の熊野材の宣伝のために映画製作を企画した。『十津川大塔時報』の記事によれば、北山方面から撮影を開始した撮影隊は、「杉植より下刈、皮剥、伐採、山出し、編筏、乗下し、製材、勝浦港積み込出帆迄詳細にフィルムに収め」⁽⁵⁾ といったという。杉植・下刈などの木の育生のための日々の作業から木材切り出しのプロセスを経て北山川を使った木材運搬過程まで、材木生産の過程を順を追って詳細に記録していったのである。いいかえれば、一本の木が材木として商品化されるまでの過程を映像によって可視化することを目指したのが「熊野材宣伝映画」であった。昭和5年9月に完成したこの木材宣伝映画は、新宮町や十津川村平谷（同年9月26日および27日）、十津川村折立（同年9月28日）において村民に公開された⁽⁶⁾。

しかし、この木材宣伝映画が受け手として設定していたのは、記事にもある通り、「京、阪、神」などの大都市の住民であった。新宮町や十津川村など吉野郡各村での上映は、完成した映画のお披露目のためのものであった。十津川村内での公開上映を伝える記事に「東京大阪名古屋の大都市へ送り大いに宣伝に努めることとなり」と書かれていたように、各木材組合は、京阪神にとどまることなく、遠く名古屋・東京にまで、地元産の木材に関する映像情報を発信する考えをもっていた。

⁽⁴⁾ 『十津川大塔時報』、昭和5年6月1日、第36号、2面。

『十津川大塔時報』は、奈良県吉野郡十津川村平谷に本社を置いていた地域紙である。この新聞は、昭和3年に発刊され、十津川村をはじめとする吉野郡全域の情報に加え、交易圏を形成する現在の奈良県五條市から和歌山県新宮市の範囲にまたがる地域情報を掲載していた。

⁽⁵⁾ 『十津川大塔時報』、昭和5年10月1日、第44号、1面。

⁽⁶⁾ 『十津川大塔時報』、昭和5年10月1日、第44号、1面。

では、4町村の木材組合が宣伝映画の製作を考えたそもそもの理由は何であったのか。それは、昭和初年、十津川や北山地区で生産される「熊野材」が受けていた「大量生産品」という否定的な評価を払拭し、江戸時代から享受していた「良材」としてのブランドイメージを取り戻すためであった。

たとえば、上北山村はかつて徳川幕府の天領で、「御材木」を納める銘木の生産地であった。年貢として収める檜には墨汁をつけ、材木に打ち込み黒印（刻印）を記し、北山川を筏を組んで和歌山県の新宮に流し、そこから江戸へと運んだ。「御材木」の生産地としての上北山村の村民が代々抱いてきた誇りは、同村教育委員会が編んだ『わたしたちの村』（1976）の中の「北山の材木が良材であることが、天領となり御材木所として決められたのでしょう」ということばに今もお引き継がれている⁽⁷⁾。

しかし、昭和初期、集約林業と良材主義で発展を遂げた吉野式林業に対し、索道設置によって推進された十津川村・上北山村を中心とする「材積多額主義」の林業は、新聞紙上で「北山方面の比較的粗放な施業」との評価を受けた⁽⁸⁾。吉野郡川上村を中心に生産される高級品の銘木「吉野材」に比べ、十津川・上北山村で産出される木材は大量生産品であるとのレッテルを貼られてしまったのである。大正8年に上北山村河合・三重県尾鷲町間に北山索道が設置されて以来、この索道を使って小径の材木が多く出荷されていた。小径の木材も切り出して販売し、その後に植林を行い再び切り出す形態をとる「材積多額主義」の林業は、木材価格に比べて造林費が高く収支があわなくなってきた時代の林業が必然的に採用する経営形態であった。しかし、この「材積多額主義」の林業が、熊野材の評価を落とすことになった。そのため、十津川と北山の木材業者は、銘木「吉野材」に対抗して、かつては御料材であった「熊野材」のイメージ回復の努力を迫られることになったのである。良材としての熊野材のイメージを高めるために、昭和5年撮影の映画においては、索道を使った小径材の搬出ではなく、編筏・乗下しなどの筏流しによる大口径の木材の搬出過程が撮影して収められていたのである。なお、昭和3年、当時の上北山村村長杉若金平が、熊野材を「質も良好 世界一」と謳い上げた「吉野森林の歌」を作詞しているが⁽⁹⁾、これも北山地域の内発的発展と林業振興をめざした取り組みのひとつと考えられる。

「熊野材宣伝映画」は、十津川・北山産木材に与えられた「大量生産材」というイメージを払拭し、熊野材のブランド性と、かつて「御材木」を産出した誉れ高い村としての地

⁽⁷⁾ 上北山村教育委員会編、1976、『わたしたちの村』、大阪書籍

⁽⁸⁾ 「時勢を現はす林業視察——着眼点が変わってきた」『大阪朝日新聞』（大和版）、昭和3年7月7日、16750号、9面。

⁽⁹⁾ 2002年10月13日、富山尚一氏（80歳）。現在この歌を知っているのは富山氏ともう一人だけである。

域イメージを回復するための、都市の消費者向け宣伝映画であった。十津川村は、すでに1937（大正12）年に名勝映画『十津川村の探勝』を自主製作し、自らの生活空間を映像によって表象化する実践知を獲得していた。「熊野材宣伝映画」はこの実践知にもとづいて製作された映画であった。この映画はすでに失われて現存せず、いまではそのフィルム・テキストを見ることはできない⁽¹⁰⁾。しかし、撮影隊は「杉植より下刈、皮剥、伐採、山出し、編筏、乗下し、製材、勝浦港積み込出帆迄詳細にフィルムに収め」⁽¹¹⁾たと『十津川大塔時報』の記者が書いていることから判断して、撮影の大半は、技師がカメラを担いで山仕事の現場に同行して行ったものと考えられる。使われたカメラは、昭和初期に普及していた軽量小型カメラであったと推測される。山間の僻村から都市に向けて映像情報を発信する実践知は、こうした映像メディアに関わるテクノロジーの開発・進歩によって、その蓄積を増していったと言える。

2 『昭和3年の記録』——奈良県吉野郡上北山村を事例として

2-1 奈良県吉野郡上北山村——モダンな山村

『昭和3年の記録』（2巻相当、サイレント）映画の分析に入る前に、現在は過疎山村となっている上北山村の概要を簡単に紹介しておきたい。

奈良県吉野郡上北山村は、明治22年4月に明治行政村として誕生した。明治21年の町村制公布以前には北山郷上組と称していた西野（西原）、小瀬、椋本、川合（河合）、白川の5ヶ村が合併して成立した。東は三重県北牟婁郡、三重県多気郡に接している。西は奈良県吉野郡天川村、大塔村、十津川村と接する。南は東熊野街道に沿って奈良県吉野郡下北山村と接している。北は奈良県吉野郡川上村と接し、奈良県平野部および大阪方面にでるためにはこの川上村を経由して吉野郡上市町に至る。言語圏は和歌山、三重両県にまたがる「熊野」地方に属する。村内の大台ヶ原一帯は吉野熊野国立公園に指定されている。総面積の9割が山林であるこの村では、明治初期には、林業や椎茸の天然栽培を行っていたとはいえほとんど自給自足の生活であった。

上北山村役場が製作している公式ホームページは、「深い山々にかこまれた村の村政史」は「二本の道の歴史」であったと記している⁽¹²⁾。ひとつは東熊野街道である。明治31年、

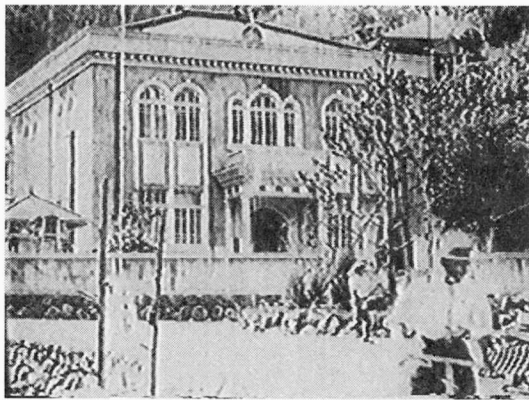
⁽¹⁰⁾ 2001年8月、11月、十津川村森林組合事務所、上北山村役場での聞き取りによる。

⁽¹¹⁾ 『十津川大塔時報』、昭和5年10月1日、第44号、1面。

⁽¹²⁾ <http://www.vill.kamikitayama.nara.jp/>

東熊野街道が県道に編入されると、以後10年をかけて全面的改修工事がおこなわれた。現在の国道169号線の前身であるこの道は、明治43年、奈良県吉野郡上市町と三重県南牟婁郡木之本町を結ぶ幹線道路として全通して以来、村の近代化に寄与してきた。開通後には馬車が通いはじめ、大正中期にはオートバイも走った。昭和初期には自動車も通る道となっていた。

もう一つの道は、「わが村の近代化をもたらした“第二の道”」と記されている「北山索道」である。現在でも河合の小字渡瀬（通称）は「索道場」と呼ばれている。大正8年8月、三重県尾鷲市の高木道之助氏が、上北山村河合の白川又原生林の伐採事業をはじめるとともに、北山索道と白川又索道を設置した。第1次世界大戦による木材需要の増加によってはじめられた伐採事業は、白川又で切りだされた木材を、三重県尾鷲町まで約10キロの道のりを索道によって運ぶという大がかりなものだった。この索道は同時に太平洋側からの海産物の流入をもたらし、村の食生活を一変させた。林業労働者の流入も多くなり、白川又の人口は河合区に匹敵するほどになり、当時の上北山村の人口は3800人を数えるほどであった。白川又伐採事業は、上北山村河合を中心とした村の繁栄の礎であった。



図版1 昭和3年当時の上北山村役場

こうして森林事業で栄えた上北山村役場は、大正14年に洋館2階立ての庁舎を新築する。昭和3年には、河合区が御大典記念事業として区有の通俗図書館を洋館建てで建築している。映画にも撮影された上北山村河合の集落は、「モダンな山村」とも言うべき姿を呈していた（図版1参照）。

次節では、この時期の上北山村のメディア環境を概観し、映画メディアに関わる地域名望家について考察する。

2-2 地域名望家と映像メディア

上北山村は、林業による財政力豊かな村であった。村民は、さまざまなメディアを享受することができた。『昭和3年の記録』にも登場するが、大阪毎日新聞と大阪朝日新聞は上北山村民の主要購読紙であった。新聞販売店は『キング』や『婦人倶楽部』などの大衆雑誌の取り次ぎも行っていた。

上北山村の村民は、新聞メディアや雑誌メディアだけでなく、映像メディアも楽しんで

いた。前教育長の富山尚一氏（80歳、河合在住）によれば、氏の祖父の兄にあたる富山豊平氏が、大正前期に河合区で「大正座」を創業し、芝居、映画、「連鎖劇」を興行していたという⁽¹³⁾。商圈や通婚圏を形成していた三重県の海岸沿いの御浜町には、上北山村に巡業した巡回映画についての記録が残されている⁽¹⁴⁾。

上北山村の村民の映像体験は、もちろん、「大正座」における活動写真の上映が最初ではない。日本人は、近代的な映像メディア装置として活動写真以前に幻燈をもっている。上北山村の村民の映像体験もまずこの幻燈からはじまった。明治33年1月17日付『新大和』新聞は、「上北山村の予防」の見出しで、「毎大字に一夜もしくは連夜ペスト病予防に関する衛生幻燈会を開会しつつありて已に去十三日は大字河合景德寺内に同会の催しあり」と報じている。当時流行したペスト対策のために、村役場が通俗教育の一環として主催した衛生幻燈会についての記事である。

同記事は、幻燈の解説者と当日の幻燈会の模様について次のように記している。

「村医杉若金平氏は職掌柄数多の映画に就き懇切周到頗る熱心なる説明もて始終一同に感動を与え閉会したるは同夜十二時過ぎなりき。」⁽¹⁵⁾

衛生幻燈会は、村内各大字を巡回して順次開催された。各大字の映写会場で幻燈画の内容を聴衆に説明する役割を担ったのは、区長や村医などの地域名望家たちであった。河合区における幻燈会で解説をした杉若金平氏は、後に第6代上北山村長に選ばれている。

上北山村の村民に映像体験をもたらした装置は、このようにテクノロジーの進歩にともなって、幻燈から活動写真へと変わっていった。小椋区在住の池上房江氏（92歳）は、尋常小学校に通っていた時分に小椋にあった通俗図書館で催された活動写真会のことを回想して、会場を埋めた区の人たちの人いきれで気分が悪くなったことを語っている。大正10年前後のことである。またこの時代には、すでに述べたように、河合区に映写装置を備えた芝居小屋が存在した。上北山村の村民は、豊かとは言えないにしても決して乏しくはない映像体験をもっていたのである。

『昭和3年の記録』の製作は、明治後期から大正時代を通じて形成されていった上北山村のメディア環境の中での営みであった。このメディア環境の形成を促したのは、大正座

⁽¹³⁾ 2002年10月13日、上北山村役場会議室にて聞き取り。

⁽¹⁴⁾ 芝崎格尚氏への聞き取り調査（2001年11月18日）、および「上野青年団の活動写真」御浜町文化協会編、1992、『御浜古老ばなし ふるさとのがたり 山間編（尾呂志・上市木・神木地区）』、20-21。芝崎氏は、「上野青年団の活動写真」の内容は、芝崎氏の父親の体験談にも基づいていると言う。

⁽¹⁵⁾ 明治33年1月17日付『新大和』、第2552号。

の経営者だけでなく、幻燈や活動写真の上映会に携わってきた村の知名人たちの映像メディアに対する関心と経験知であった。『昭和3年の記録』の後編の中に、「後援者」として当時上北山村長の職にあった杉若金平氏、河合区の森本保之氏、小椋区の中岡清氏らの名前が出てくるが、この記録映画製作の提案者はこうした村の名望家たちであったと推測される¹¹⁶⁾。

3章と4章では、それぞれ前編と後編の内容分析を通して、聞き取り調査の手法をも用いながら、上北山村の人々による「文化的自画像」の生産、流通、消費の過程と、その際に動員されていった神話や政治的言説を考察する。

3 「前編」映画——撮影された「文化的自画像」

3-1 「前編」の内容紹介

「前編」映画の前半は、小椋と河合の集落内にある神社や公共施設を主に撮影している。【第二巻】の字幕から始まる前半部分は、まず字幕で場所と名前を示したあと、撮影した映像がくるという形式を取っている¹¹⁷⁾。【小椋 龍川寺及北山ノ宮御墓】では龍川寺の映像（パン）／北山ノ宮御所址の碑／北山ノ宮御墓入り口、宮内省の立て看板などが映されている。続く【小椋尋常小学校 及 区長 中岡利一氏自宅】（引用者注：「利一」は「理一」が戸籍登録名）では、小椋尋常小学校の表札・玄関／小学校校舎（パン）を映した後、中岡理一氏自宅（パン）と、中岡氏自宅に掲げられた「神武天皇御銅像大台ヶ原山奉建祭典部」の表札などが撮影されている。その後、【県社 北山神社……】、【村社 八阪神社 及 北山橋 河合全景……】と二つの寺社が映されている。

さらに、上北山村河合の集落をロング・ショットで撮影した後、カメラをもって自転車の荷台に後ろ向きにのったと推測される撮影者が、河合村落内の様子を撮影している。河合の集落を自転車で走る人や河合小椋間の道を走るアメリカ製ビューイック、北山側にかかる釣り橋、河合区内に敷かれた北山索道のトロッコのレール、木材搬出場「索道場」ではたらく労働者などを映している。

続いて、河合区の中心地である【上北山村役場 及 区長森本保之 自宅……】に移り、

¹¹⁶⁾ 2002年10月13日、富山尚一氏（80歳）。

¹¹⁷⁾ この映画には、モンタージュなどの高度な劇映画の技法はほとんどみられない。本稿の関心は何が映されているのかにあるので、場面の転換点（カット）は／で、字幕は【 】を付して略記する。なお、固定撮影ではなく、クローズアップやパンなどの映画技法が使われている場合は、（ ）を付して記した。

河合区にある洋館2階建ての上北山村役場と、役場玄関に整列する和装の第6代杉若村長と洋装の役場職員たち、森本保之氏自宅と森本氏を撮影している。【河合景德寺】、洋館2階建ての【河合療院】と【通俗 河合図書館】、【更谷新聞舗】などが映し出される。【北山自動車株式会社 及 代表商店……】は、「モダンな山村」ともいうべき内容となっている。アメリカ製自動車ビューイックと洋装の運転手、乗客の洋装婦人に始まり、河合の「カフェー」でくつろぐ客やビールをつぐ丸髷の「女給さん」が映される。その後、複数の旅館や仕立て屋、薬局、建具店、理髪店、菓子店などの商店がひとつずつ映し出されていく。

「前編映画」の後半部分は、河合消防組の演習シーンを映しており、半鐘を鳴らす青年の映像から始まる。ここでは、「アイリス」、つまり、四角い映画の画面に黒色の丸い枠をかぶせ、中心の被写体を強調する映画技法を使っている。その後は、纏を先頭に走る河合消防組などの人物の映像と、「河合消防組」のプレートがついたエンジンつきポンプ放水車とが交互に撮影される。ポンプ車のエンジンや水圧計と、操作する消防組員の姿がカットバック（素早い場面転換）を多用して撮影されている。

次節では、この映像の意味を解釈してゆく。

3-2 区の「文化的自画像」——「河合」と「小椋」

現在村教育長を務める中岡孝之氏（71歳、小椋在住）は、『昭和3年の記録』のビデオを見ながら、「昭和3年は、山の、活性化、開発の年」であったと語った⁽¹⁸⁾。この昭和3年という年は、昭和天皇即位「御大典記念」事業が各地で催された年であったことにまず留意したい。河合区では、御大典記念事業として洋館建ての通俗図書館を建設した。こうした「御大典記念」を冠した地域事業は全国各地で行われた（田中1993）。天皇家に関わる史蹟を多く有する奈良県では、御大典ブームというべき状況を呈していた。

上北山村における御大典記念事業は、大字（区）単位の事業であったことに特色がある。中岡氏の表現を借りて言えば、各区長は「小さな村長みたいなもん」であった。深い山に抱かれ険しい峰に阻まれて点在する各区は、それぞれ財産区を形成し、区会を開いていた。区単位で行われる事業は、「村」ではなく「区」単位のローカリズムを醸成していた。

区の論理は、国や県庁、郡役所の論理と対立することがあった。昭和3年には、小学校の統合を促進していた県教育行政の施策に対し、区有として出発した小学校を持っていた

⁽¹⁸⁾ 2001年10月3日、上北山村役場宿直室にて聞き取り。

河合区と小椋区とが統合に反対している。両区の小学校は、区民の出資によって建てられたものであり、区の住民には、小学校は区のシンボルであり誇りであるという意識があった。しかし、いずれの小学校も、新聞紙上で「校舎狭隘、腐朽荒廃」と書かれ、対策が急がれる状態であった。県教育課は、こうした現状を踏まえ、両校の統合を計画し、県の視学官が両区に赴き説得に当たった¹⁹⁾。しかし、両区のローカリズムは根強く、統合は容易には進まなかった。河合、小椋の小学校が合併して上北山尋常小学校となったのは、ようやく10年後の昭和13年4月、新校舎が落成したのは11年後の昭和14年1月のことであった。

上北山村は、このように、区単位のローカリズムの強い村であった。したがって、『昭和3年の記録』を分析するに当たっては、「上北山村」という行政村の枠組みだけではなく区という枠組みをも参照枠にして、映像の背後にあるコンテクストを読み解いていかなければならない。

前節で見たように、「前編」映画の後半部分には、河合消防組の演習シーンが写されていた。この場面について、前教育長の富山氏は、「小椋に張り合う意味も、あったのでは」と解説した。「前編」映画の冒頭には、小椋の龍川寺や北山宮の御墓所の映像があった。龍川寺は、後南朝最後の御所が置かれたところとされ、北山宮御墓所は1912（大正元）年に宮内省から治定を受けた「皇蹟」であった。河合区は、村の行政・産業の中心地であったが、そうした国家公認の歴史的遺跡をもたなかった。そこで、「河合には、ポンプも、自動車も、あったという、一種の誇示を、映画をつくって、したのではないですかあ」と、富山氏は分析してみせた²⁰⁾。この富山氏の分析を敷衍して言えば、「前編」の小椋の龍川寺や北山宮の建物の映像と、河合区の洋館建ての建物や最新鋭の消防ポンプを導入した河合消防組の演習などの映像は、両区民がそれぞれの区の独自性を映像によって定着した「文化的自画像」であったということになる。各区の「文化的自画像」によって構成されたこの記録映画は、村内各区で上映され、区同士の自己提示とせめぎ合いに使われたと考えられる。

しかし、「文化的自画像」は、「区」というローカルな枠組みだけで描き出されるものではない。小椋の龍川寺は宮内省から治定を受けた皇蹟であるが、この龍川寺の自画像の造型には、顕在化してはいないが、ナショナリティーや都市との関係が関与している。「文化的自画像」の概念は文化人類学者落合一泰によるものであるが、落合は、近代国家を単位として作られた文化的自意識を、個人や集団が自分の生命に歴史的意味を与えようとする

¹⁹⁾ 「金がありすぎて 学校統一行悩む 上北山の河合と小椋」『大阪朝日新聞』（大和版）、昭和3年7月7日、16750号、9面。

²⁰⁾ 2002年10月13日、富山尚一氏（80歳）

る複合的な表現願望として見直すという視点を提起している（落合1998：108-109）。4章では、落合の問題提起をふまえて、「大台ヶ原」という観光資源、「神武大帝」という天皇神話、「上北山」という明治行政村の枠組み、これらが全て接続されたタイトルが付けられている「後編」の映像を、「区」―「村」―「県」―「国」という枠組みを往還しながら、背後にある地獄的コンテクストを読み解く。

4 フィルム・テキストをめぐるポリティクス ――「後編」映画をめぐる

4-1 「後編」の内容紹介

「後編」は、タイトルを冠した短編映画の体裁になっている。タイトルの文字の背景には、神武天皇像と山容を描いた絵が使われている。しかも、金鶏のまわりを囲むように白い点を打って、光り輝くさまを表現している（図版2参照）。続いて【世話人】として、



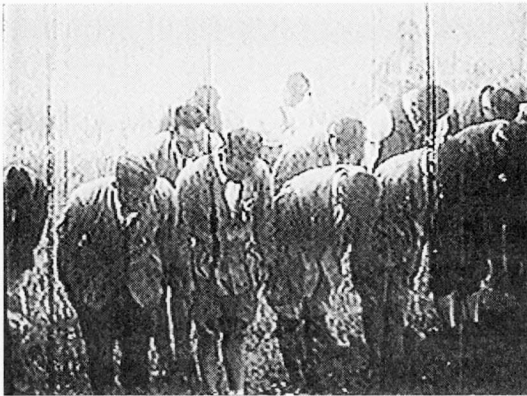
図版2 「後編」映画のタイトル画面

村外者でこの映画の撮影技師と思われる原口昌徳、森下哲次郎両氏の名前と、「後援者」として上北山村の「杉若村長」、河合区の森本保之氏ら、小椋区の中岡清氏らの名前が列挙される。その後、【神武大帝 御銅像 及 牛石ヶ原……】の字幕が入り、金鶏をもった神武天皇像と、菊の紋章が彫られ「神武天皇」と記された碑が映し出される。笹が生い茂る大台ヶ原を歩いてきた人々が、神武帝像の前に

到着する光景が映し出されると、彼らは神武帝像の足下へ整列し、一礼する。洋装もしくは軍服、青年団の制服を着用している人が大半である（図版3参照）。

続くカットで、神武天皇東征神話の重要なファクターである「金鶏」をクローズアップし、映画技法「アイリス」を用いて映し出す。その金鶏からティルトダウンしながら、つまりカメラを下方向へ降ろしていきながら、神武帝像の細部をクローズアップ撮影していく。銅像に向かって一礼する人々が映し出されたあとは、大台ヶ原の山並みや原生林、大台ヶ原の名所である大蛇窟、中の瀧、西大台の風景が次々と映しだされていく。

風景の映像が終わると、【大台協会本部 参拝者の群 及 会長 古川嵩】と題して、大台教会正面がまず映され、神殿前にたつ神主や正装した行者たちの登山シーンがある。



図版 3 神武天皇像に一礼する上北山村の人々

最後に、教会前で神武帝銅像の建立を祝う餅まきがおこなわれ、万歳三唱で締めくくる人々を撮っている。大台ヶ原での撮影はここで終わり、【村社 水分神社 及 忠魂碑 並に蛍橋附近……】と題し、忠魂碑や北山川の水流、吊り橋の蛍橋附近を撮影して映画は終わる。

次節では、この映画を、御大典というナショナル・イベントを動員しながら描かれた「文化的自画像」という視点から

捉えるために、映像の意味や、字幕に記された人々の動きを探っていく。

4-2 ローカリズムとナショナリズムの交錯——神武天皇像建立をめぐる

大台ヶ原は、神武天皇東征神話の舞台であった。神武天皇が熊野灘から大和盆地の橿原の宮に入ったルートについては、大台ヶ原を経路の一部とする「北山川上説」と、隣村の十津川街道を通る十津川説とのふたつがあった（星野1980）。そして大台ヶ原は上北山村の村域であった。昭和2年、この大台ヶ原山中の牛石ヶ原に神武天皇の像を建立する計画が上北山村にもちこまれた。神武天皇像建立計画を立てたのは、大阪浪速区河原町二丁目に住所をおく皇宗奉賛会であった。碑文には、「建国の御稜威を永遠に奉讃し愛国の精神を萬世に発揚せんことを祈誓す」るため、「神武大帝の尊像を御由緒の地方大台ヶ原の霊獄に建設し奉り謹て 御英姿を跪拝」する旨が刻まれている⁽²¹⁾。

皇宗奉賛会のこの趣旨に、修験道の大台教会長古川嵩氏が賛同し、上北山村の村長をはじめとする名望家たちもこれに呼応し、計画は実行に移されることになった。

神武天皇の銅像は、大阪・天王寺区寺町4丁目の大谷鑄造所で、「御鑄物師 大谷相模大掾二十八世 藤原孝義」の手によって製作された。完成した銅像は昭和3年7月1日、天王寺公園内に置かれ、会員および一般客に公開された。当時の新聞記事は写真入りで、「高さ一丈一尺、目方七百余貫、金鷄高く輝く御弓（一丈八尺）を持たせ給ひ、建国の御稜威を永遠に伝え奉る」と紹介している⁽²²⁾。銅像は、その後昭和3年7月3日、三重県尾

⁽²¹⁾ 原文カタカナをひらがなに、旧字体を新字体に改めた。なおこの碑の銘「神武天皇」は近衛文磨の揮毫である。また、碑文と和歌については、「昭和二年十二月十八日 明治神宮宮司 陸軍大将 一戸兵衛撰並書」と刻まれている。

鷺町に本社を置く三国木材会社が所有する三国丸に乘せられて、大阪港を出発した。三国丸は、北山索道を開設した高木道之助氏の所有であった。7月20日に尾鷺町に到着した銅像は、尾鷺町の在郷軍人と青年団によって北山索道に運ばれた。北山索道古和谷駅に到着後、北山青年団らが「労力奉仕」して、台高山地の「四里の険道」を牛石ヶ原まで運んだ⁽²³⁾。この時、尾鷺町に下山して一連の仕事の世話役となったのが、「神武天皇御銅像大台ヶ原山奉建祭典部」の表札を自宅に掲げ、「前編」映画にも撮されていた小椋区長の中岡理一氏と、大台教会長の古川蒿氏であった。

除幕式は同年8月19日に行われる予定であったが、「山上暴風雨のため」延期されることになった⁽²⁴⁾。昭和3年8月20日、午前10時からあらためて除幕式が挙行された。除幕式には一般人、在郷軍人会員、青年団員からなる奉賛会員百人弱が登山して参列した。上北山村からも、男女を問わず成人が参加することになっていたが、この日もまた大台ヶ原は暴風雨に見舞われたため、女性は急遽出席が取りやめになった⁽²⁵⁾。奈良県庁からも赤土内務部長と阪田公園課長が参列する予定になっていたが、こうした天候の事情により、祝電を打つにとどまった。同日午後一時からは、大台教会本堂で除幕奉祝祭が行われた。その翌日には、正午から大台教会開祖である古川蒿氏の開山四十年臨時大祭が行われた⁽²⁶⁾。

「神武天皇」の碑の台座には、発起人10名、幹事14名、賛助会員28名、京都・和歌山・横浜などに居住する正会員153名の名前とともに、「特別会員」として上北山村長杉若金平氏、銅像運搬を主導した河合区の更谷太郎氏、高木道之助氏の名前と彼が社主を努める「北山索道会社」と「三國木材会社」の名前が刻まれていた。

『昭和3年の記録』の「後編」は、神武天皇像除幕式と大台教会における除幕奉祝祭の記録映像であった。村長や区長、大台教会長など村の名望家たちが世話役となって行った「上北山村のイベント」の映像であった。しかし、神武天皇像建立は御大典記念行事の一環として計画されたものであり、このことは、神武天皇東征神話を視覚化した巨大なモニ

⁽²²⁾ 「大台ヶ原山に建設の神武帝の御銅像 御尊容貴くでき上る」『大阪朝日新聞』（大和版）、昭和3年7月3日、16746号、9面。および銘文より引用。

⁽²³⁾ 「でき上った神武帝の御銅像 北山青年団の労力奉仕で 愈よ大台ヶ原に奉安」『大阪朝日新聞』（大和版）、昭和3年6月16日、16729号、9面。および、2002年9月16日、中岡孝之氏より聞きとり。

⁽²⁴⁾ 「大台ヶ原山上 大荒れに荒れる 神武天皇御銅像除幕式も つひに延期となる」『大阪朝日新聞』（大和版）、昭和3年8月19日、16793号、9面。

⁽²⁵⁾ 当時18歳であった池上房江氏は、除幕式の日のことを次のように語っている。「髪結って、着物きせてもろて、きれいなかっこしてなあ、みなで行くはずやったんが、どえらい大雨で、女の子はあかん、いうことになって、結局行かれませなんだんでな。」2002年9月16日、小椋在住の池上房江氏（92歳、女性）への聞き取り。

⁽²⁶⁾ 「吹き荒ぶ嵐の中に仰ぎ奉る帝の御英姿 きとう滞りなく除幕式を終わった 大台ヶ原の神武天皇御銅像」『大阪朝日新聞』、昭和3年8月20日、16790号、7面。

ユメントの建立というイベントが、上北山村の河合区と小椋区にとどまらず、村、県、国家、さらにはナショナリズム団体や大台教会がひとつにまとまる結節点としての機能を果たしていたことを示す。『昭和3年の記録』の「後編」は、したがって、ナショナリティーとローカリズムが交錯する一点で一大イベントを成し遂げた上北山村の「文化的自画像」と位置づけることができるだろう。

ここまで、上北山村の「文化的自画像」としての映像の意味を読み解いてきたが、なお疑問点が残る。まず、大台ヶ原という険しい山中になぜ神武天皇像を据え付ける必要があったのか。また、なぜ映画を製作して記録しておく必要があったのだろうか。さらに、誰に見せることを考えていたのだろうか。次節では、この映画の背後にある社会的・経済的文脈について考察する。

4-3 村の観光開発と近代化 —— 神武天皇東征神話、後南朝史蹟、御大典、国立公園構想の利用

大台ヶ原と大峰山は、古来より修験道の行者たちの信仰の対象であった。だが、1-2でもふれたように、大台ヶ原は、大正13年頃から登山・ハイキングの地「大和アルプス」として知られるようになり、その麓の上北山村には多くの登山客が訪れ宿泊するようになっていた。「前編」映画に撮されていた旅館がそうした登山客の宿泊所になっていた。各種学校団体も登山のために上北山村を訪れ、『大阪毎日新聞』の記事によれば、「大和山岳会吉野支部宛に全国各地から毎日五、六十通の照会状が舞いこみ応接にいとまないほど」⁽²⁷⁾の状況を呈していた。

こうした登山ブームを背景に、昭和3年、大阪営林局によって「大和アルプス宣伝映画」が製作された。奈良営林署管内の国有林を含む大峰山と大台ヶ原を撮影した映画であった。この映画は、1930年にドイツのミュンヘンで開催予定の世界初の万国登山博覧会に出品することを意図して製作されたものであった。「大和アルプスの映画や植物、林業の分布状態などを出品し雄大な大和アルプスの山岳美を紹介することになった」と新聞は報じていた⁽²⁸⁾。

官公庁から修験道団体、登山ファンがつくった「吉野山岳会」まで、さまざまな団体が

⁽²⁷⁾ 「吉野群峰目がけて 諸校の団体 続々登山の計画」『大阪朝日新聞』（大和版）、昭和3年7月17日、16760号、9面。

⁽²⁸⁾ 「大和アルプスの映画や植物など ドイツの万国登山博へ出品」『大阪朝日新聞』（大和版）、昭和3年9月23日、16828号、9面。

大台ヶ原に資本投下を行い、宣伝や登山客の啓蒙活動を展開していた。宣伝活動を通じた観光客誘致は、上北山村の各区の目標でもあった。新しい洞窟を「発見した」と言って大台ヶ原に調査隊を呼び、上北山発のニュースとして新聞紙上に発表させるという「村からの宣伝→調査→発見→新聞での宣伝」という方策が採られていた。昭和3年には、上北山村西原の「上北山村保勝会」が山上ヶ嶽奥駈道路を開削し、まだ世に知られていない5、6ヶ所の洞窟や瀧を宣伝した。大和山林会吉野支部が調査にあたり、それぞれに命名するとともに、村青年団が探勝道路の建設に着工した。こうした動きは『奈良新聞』紙上で報じられた⁽²⁹⁾。上北山村の各区は連合して道路整備と村の宣伝を継続して行った。大台ヶ原と大峰山への登山ブームは、村の近代化を促進するための格好の材料であった。

村の名望家の中には、観光資源を利用することを唱え、事業を起こすものもあった。御大典の前年の昭和2年5月、河合区と小椋区の有志が、「前編」映画に撮されていた「北山自動車株式会社」を立ち上げていた。小椋区長で後に村長も努めた中岡理一氏をはじめ、的場幸次郎氏、福中清一氏と、三重県尾鷲町の肥田喜次郎氏、山本文治氏らが資本金7万5千円を共同出資して設立した会社であった。昭和18年に出版された『上北山村誌』は、設立目的と経緯を次のように記している。

「地方産業の開発 史蹟名勝の探勝等一口に交通機関の完備に挨つべきや論なし。然るに全国に名を負う林産物も大台ヶ原山の雄姿も北山川の清流も又後南朝の歴史を秘むる史蹟も土地僻遠交通不便の為或は開発せられず 紹介せられずして幾星霜」(水口1943: 175)

大台ヶ原や皇室関係史蹟は、このように、「地方産業の開発」のために利用されていた⁽³⁰⁾。観光客の輸送を目的とした北山自動車は、アメリカ製自動車ビューイックを3台購入した。上北山村河合を起点とし、隣村の川上村との中継地点である「今西茶屋」と下北山村小口の間を結び、大阪から吉野郡上市町、川上村を経て村内に入る客と、三重県側から木之本町を経て村内へ入る客を運んでいた。そのルートは、2-1で紹介した「東熊野街道」、つまり現在の国道169号線である。公式ホームページが「第一の道」と記したように、隔絶性の高い上北山村では、県道の東熊野街道の整備は村民の悲願であった。

「吉野—川上—木之本」を結ぶ自動車道路の整備と北山自動車の事業は、上北山村周辺の三重県南牟婁郡の町村を国立公園構想に参画させる引き金になった。昭和3年当時、三

⁽²⁹⁾ 「山上ヶ嶽裏の神秘境を紹介」『奈良新聞』昭和3年8月7日、10556号、3面。

⁽³⁰⁾ 「皇室ブランドをダシにした地域利益の追求」(古川1998: 9)という視点は、古川隆久の一連の研究から示唆を得た。

重県南牟婁郡木之本町では、林業、農業ともに疲弊しており、その打開の道を自動車道路に求めていた。奈良県も、吉野国立公園への指定獲得を見越して、県道の整備を続けていた。奈良県議会は、国立公園速成を期する建議案を可決し内務省への提出を済ませ、さらに吉野国立公園期成会を組織し挙県一致の運動を展開していた。こうした動きの中で、三重県では、熊野から大和へ東征した「神武天皇神話」を利用して、南牟婁郡を国立公園の区域に加えて地域の発展をはかる計画を立てた。上北山村との関係が深い南牟婁郡御浜町、鬼ヶ城を加えた「熊野」地域を国立公園区域に加えることを要望した建議書が、昭和3年7月、三重県臨時県議会で可決され内務省に提出された⁽³¹⁾。「吉野熊野」国立公園指定をめぐって、奈良県と三重県が協同して内務省への働きかけを繰り返していくことになったのである。

上北山村にとっては、神武天皇東征神話を利用した観光開発とそれにとまなう村の近代化が順調に進んだため、結果的には当初の意図どおり進んだことになった。隣県をも巻き込んだ国立公園促進運動は、昭和11年、内務省告示第33号によって、大台ヶ原・大峰山が吉野熊野国立公園に指定されて結実した。その後、神武天皇像を擁する大台ヶ原の案内や観光用冊子には、「牛石が原には畏くも 神武天皇の御勇壮なる御銅像を拝す」といった文句が繰り返されて行った（岸田1940：3）。

昭和18年発行の『上北山村誌』は、この銅像について、「近年尊置せられたる神武天皇御銅像屹然として紀の海を臨みて立たせ給ふは森源の極みなり」と記した（水口1943：29）。また、国立公園設置と指定の意義は、次のように記されている。

「本村の之の公園に包含せらる、地域は神武天皇御東遷の聖蹟と南朝最後の皇胤北山宮史蹟、之に加うるに壮大なる山容を山岳宗教の靈山大台ヶ原山あり。千古斧城を加えざる林地は登山者の目を驚かしめ 北山川の急端□流筏下りに戦慄の快感を味はしむ。国立公園としては稀に見る最適地なり」（水口1943：28）

この一文は、『昭和3年の記録』の「後編」、つまり『大台ヶ原山 神武大帝御銅像 及上北山全景』の映画解説文にこそふさわしい内容である。昭和3年、「神武天皇神話」や「御大典」などを動員して作られた大台ヶ原や上北山村の「文化的自画像」は、その後の国立公園計画や奈良県の施策の進展によって具体化し、流通していった。それは同時に、大台ヶ原で登山やハイキングを楽しむ都市部の人々によっても消費されていったのである。

⁽³¹⁾ 「吉野国立公園 速成の建議 三重県でも力揃」『奈良新聞』昭和3年6月19日、10508号、2面。

おわりに

河合と小椋のふたつの区の地域名望家がそれぞれの区の利益を実現するために推進した内発的発展としての運動は、神武天皇神話や国立公園というナショナル・レベルの参照枠組みを得たとき、村役場や青年団などを巻き込んだ全村的運動へと発展した。とくに、神武東征神話は「国立公園」という枠組みと結びつき、開発・発展をめざす上北山の村政のための資源となった。この神武東征神話はさらに、隣県の本木本町や御浜町などの「熊野」地方をも巻き込んだ国立公園期成運動のための資源ともなった。関係する町村は、神武天皇神話を利用しつつ国立公園構想に参画し村の開発と発展を目指したことによって、結果的にナショナリズムへ包摂されていくことになったのである。

『昭和3年の記録』は、村民がナショナル・レベルの参照枠組みを得て自らの村を再把握した「文化的自画像」としての映像記録であった。しかし、この映画はまた同時に、ナショナリズムに包摂される可能性をひめる「内発的発展」の痕跡をとどめた映像記録でもあったのだ。

本稿でとりあげた山村における映画製作の営みは、従来、近代日本の民衆文化論においてまったく考察されることのなかった対象である。日本の民衆娯楽研究において、権田保之助は民衆娯楽論の先覚者として位置付けられる（吉見1994）。権田は、大正11年に「民衆娯楽の基調」を著し、その中の「新しき農村の娯楽問題」において、農村の新興娯楽としての活動写真に考察を加えている。その後も「農村娯楽問題考察の基底」（昭和8年）を発表するなど、権田は、農村における活動写真に関心を持ち続ける（権田 [1922] 1974、[1933] 1975）。しかし、日本の民衆娯楽研究は、権田を近代日本の都市文化研究や文化社会学の文脈において評価するのみで、農村の娯楽としての映画に関する権田の研究は等閑に付されてきた。

こうして日本の民衆娯楽研究もしくは民衆文化論において、農村と映画は、今日もなお研究対象として真摯に取り上げられないことがない。ましてその名を知る者が少ない山村の村役場が村の生活や風景を撮影した記録映画となると、その内容の地域性のゆえに、まったく研究者の目が向けられないのが実情である⁽³²⁾。しかし、モダニティーの象徴として映画を捉える見方から離れてみれば、あるいはまた、古き良き時代へのノスタルジーとして映画をみるまなざしを捨ててみれば、山村という都市から遠く離れた場所で、自らの村の「文化的自画像」を映画というモダン・テクノロジーを利用しつつ描き出し発信しようとする山村の人々の姿が浮かび上がってくるだろう。確かに、「文化的自画像」を描き出す過程は、ナショナリズムに包摂されていく側面を持つ。しかし都市で生産される支配的言

説や政治的言説、あるいは神話を流用しながら、映画によって「文化的自画像」を構築し自己提示をおこなう山村の人々の姿は、山村の人々を啓蒙の客体として措定する従来の農村社会研究の固定的観念を相対化することにつながるはずだ。山村の人々の能動的な映画体験は、こうして、今後さらに考察を加えられるべき有意義なフィールドとしてわたしたちの前にある。

参考文献

- 石附実、1992、『近代日本の学校文化誌』思文閣出版
 板垣邦子、1992、『昭和戦前・戦中期の農村生活：雑誌「家の光」にみる』三嶺書房
 井上亀五郎、1902、『農民の社会教育』金港堂
 岩崎正弥、1997、『農本思想の社会史——生活と国体の交錯』京都大学学術出版会
 上杉孝実・大庭宣尊、1996、『社会教育の近代』松籟社
 大門正克、1994、『近代日本と農村社会——農民社会の変容と国家』日本経済評論社
 ———、2000、『民衆の教育経験——農村と都市の子供』青木書店
 落合一泰、1996、『文化的性差、先住民文明、ディスタクシオン——近代メキシコにおける文化的自画像の生産と消費——』『民族学研究』特集「文化的自画像——名乗られたものとしての文化」、1996年4月号、61巻1号、52-80、日本民族学会。
 ———、1998、『近代メキシコの文化的自画像』原尻英樹編著『世界の民族——「民族」形成と近代』、放送大学教育振興会
 上北山村教育委員会編、1976、『わたしたちの村』大阪書籍
 上北山村役場、1930、『我が村 奈良縣上北山村』
 菅野正、1992、『農民支配の社会学』厚生社恒星閣
 権田保之助、1922、『民衆娯楽の基調』（再録：1974、『権田保之助著作集 第1巻』 文和書房）
 ———、1933、『農村娯楽問題考察の基底』（再録：1975、『権田保之助著作集 第4巻』 文和書房）
 ———、1938、『日本教育統計』巖松堂書店
 近藤康男、1990、『農文協五十年史』農山漁村文化協会
 佐藤忠男、1995、『日本映画史』（全4巻）岩波書店
 杉田定一、1925、『大正十四年九月吉日 北股尋常高等小学校長杉田定一先生 遺稿抄録』、野迫川村資料室、編集年不明、野迫川村役場教育委員会所蔵
 田中純一郎、1979、『日本教育映画発達史』蝸牛社
 ———、1980、『日本映画発達史』中央公論社
 田中伸尚、1993、『1928年。御大典の裏側で』第三書館
 津金澤聰廣編著、1996、『近代日本のメディア・イベント』同文館出版
 津金澤聰廣・有山輝雄編著、1998、『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社
 鶴見和子、1977、『定住と漂泊と——柳田国男の社会変動論』筑摩書房
 奈良県編、1916、『大和に於ける神武天皇聖蹟』
 奈良県、1924、『奈良県社会教育概況』
 奈良県観光課、1924、『大和山岳踏破記』
 成田龍一、1998、『「故郷」という物語——都市空間の歴史学』吉川弘文館。

⁽³²⁾ もっとも、農村を描いた映画であっても、名の知れた監督の手になる場合は、たとえば国民国家の相対化の文脈において傍証としての位置を与えられることはある。成田龍一は、『映画という「都市的なもの」を象徴するメディアで、『故郷』という物語が展開された』と述べたうえで、1937年製作の『故郷』（伊丹万作監督・脚本、東宝）を傍証として取りあげている。成田龍一、1998、『「故郷」という物語——都市空間の歴史学』吉川弘文館。

- 似田貝香門、1973、「農村社会学の系譜——成立契機と基礎視角をめぐって」蓮見音彦編著『社会学講座 第4巻 農村社会学』東京大学出版会
 蓮見音彦編、1973、『社会学講座 第4巻 農村社会学』東京大学出版会
 ———編、1991、『地域社会学』サイエンス社
 福武直、1985、『日本の農村社会』東京大学出版会
 古川隆久、1998、『皇紀・万博・オリンピック』中央公論社
 星野良作、1980、『神武天皇』吉川弘文館
 水口正夫編、1943、『上北山村誌』上北山村役場
 南博責任編集、1988、『近代庶民生活誌8——遊戯・娯楽』三一書房
 御浜町文化協会編、1992、『御浜古老ばなし ふるさとのがたり 山間編（尾呂志・上市木・神木地区）』
 民衆史研究会編、1997、『民衆史研究の視点——地域、文化、マイノリティー』三一書房
 吉見俊哉、1994、『メディア時代の文化社会学』新曜社

新聞資料

- 『新大和』（明治24年6月～大正12年6月）
 『十津川大塔時報』（昭和3年～昭和6年7月15日）

謝 辞

本稿の執筆段階で数多くの方々にご協力を賜りました。田仲裕子さんには、本稿の出発点となる上北山村の映画の存在をご教示いただくとともに、上北山村まで同行を賜りました。和田晋平さんは、貴重なお時間をさいて上北山村へ同行してくださいました。上北山村出身の関口美保子さん、五條市の小松敬幸さんは、上北山村をフィールドとするためのきっかけを与えてくださいました。

上北山村内では、中岡孝之教育長さんに映画の貸し出し許可から、本稿へのご指摘、資料の提供を賜りました。前教育長の富山尚一さんには、文献から伝説に至るまでの情報提供と本稿へのご指摘を賜りました。村教育委員会の森本晴美さんと奥様のたみ代さんには、小学校での資料探し、インフォーマントのご紹介から上北山村での滞在に至るまで全面的なご協力を賜りました。森本さんご一家には、ご母堂の池上房江さん、ご子息の森本一也・光美さんご夫妻、森本八重さんと、親子3代にわたる御協力を賜りました。また、野迫川村役場の木村佳史さんには、筆者のもう1つのフィールド先である野迫川村において、村在住の森本一也・光美さんご夫妻との出会いを作ってくださいました。お三方には、野迫川村における調査から上北山村での調査まで、多方面からのご協力を賜りました。

みなさまに、深く御礼申し上げます。

（しまおか はじめ・博士後期課程）

A Sociological Analysis of Film Making in Rural Villages in Prewar Japan : A Case Study of Kamikitayama Village, Nara Prefecture

Hajime SHIMAOKA

This study examines the film making experiences of rural villagers in prewar Japan. As motion picture films and theater are usually regarded as modern, urban culture, they have often been examined in cultural studies and media studies, but rarely mentioned within rural sociology. Due mainly to this disciplinary division, the relationship between film and the rural village has not received sufficient academic attention. This study illuminates the sociological significance of this relationship by focusing on film production practiced by prominent villagers in rural areas.

Firstly, this paper provides an overview of the filming process in rural areas through examples of film making in the Yoshino Area, Nara Prefecture. Secondly, two film texts made in 1928 in Kamikitayama village, a village in the Yoshino Area, are examined. The analysis of their contents reveal that prominent villagers during the prewar period established their village's cultural self-portraits by appropriating the "sangaku-shumi" (the promotion of hiking) policy, the Japanese nationality, and the Imperial myth of "Jinmu Tennou (Emperor Jinmu)".

This article is a case study to redefine rural villagers as subjects capable of establishing their own cultural self-portraits through the production of films.